

琉球大学学術リポジトリ

琉球諸語の喪失と活性化をめぐる言語イデオロギー
ー言語バイオグラフィーの質的分析を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学 公開日: 2022-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安元, 悠子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017927

琉球大学大学院
人文社会科学研究科委員会 殿

博士論文審査委員会

主査	石原 昌英	印
副査	宮平 勝行	印
副査	喜納 育江	印

学位（博士）論文審査の結果報告書

このたび、博士論文審査委員会として、学位論文の審査を終了しましたので、その結果について、下記の通り報告します。

記

学籍番号	[REDACTED]			学生氏名	安元 悠子		
人文社会科学研究科 比較地域文化専攻				主指導教員	石原 昌英		
				副指導教員	宮平勝行・喜納育江		
成績評価	学位論文	合格		不合格			
論文題目	琉球諸語の喪失と活性化をめぐる言語イデオロギー—言語バイオグラフィーの質的分析を通して						
審査要旨	<p>令和4年1月18日に副査の統括のもとで学位論文審査を実施した。</p> <p>本博士論文は、消滅の危機に瀕している琉球諸語に関して実施したインタビュー調査のデータを三つのテーマに分け、個々のインタビューデータをSCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いて分析したものである。三つのテーマの調査協力者は、1) 第2章：琉球諸語の復興への貢献が期待される国語教員経験者3名、2) 第3章：先島地区の出身で、島外への移動に伴う言語シフトを経験した者2名、3) 第4章：論文執筆者を含め、ニュースピーカーとして、琉球諸語の継承に関心を持ったり、実践活動に取り組んだりしている者5名、である。言語イデオロギー、言語アイデンティティ等の理論及びSCAT、オートエスノグラフィー等の方法論に関する先行研究を読みこなし、それらを援用し、インタビューデータを、琉球諸語の衰退と復興に関する個人の経験、言語意識、言語行動に焦点を当てて分析している。最終的には「言語を喪失した当事者、そして活性化に向き合う当事者が、それぞれの言語レパートリーにおける「言語的力関係」を根底から見直し、社会的な言語の階層性に拠ることなく「複数のことば」の並存を個人の中に認めることによって、支配の正当性となる言語ヘゲモニーに対抗しうる」と結論づけている。</p> <p>本研究の特徴は世代、立場、経験の異なる沖縄県出身者の言語意識、言語行動に関連する葛藤・ジレンマと調整の構造をSCAT分析により明らかにし、その構造を言語イデオロギー・言語アイデンティティの観点から論じたところにある。本研究の成果は、琉球諸語の再活性化について、理論面から一定の貢献をすることが期待される。</p> <p>以上のことから、学位論文審査会は、本博士論文が博士の学位論文に値すると判断する。</p>						

琉球大学大学院
人文社会科学研究科委員会 殿

博士論文審査委員会

主査	石原 昌英	印
副査	宮平 勝行	印
副査	喜納 育江	印

最終試験の結果報告書

このたび、博士論文審査委員会として、最終試験を終了しましたので、その結果について、下記の通り報告します。

記

学生番号	学生氏名	安元 悠子	
人文社会科学研究科 比較地域文化専攻		主指導教員	石原 昌英
		副指導教員	宮平 勝行・喜納 育江
成績評価	最終試験	合格	不合格
結果要旨	<p>副査喜納育江教授の総括のもとで、申請のあった博士論文の内容とそれに関連する授業科目について口頭による最終試験を行った。本論文題目は、「琉球諸語の喪失と活性化をめぐる言語イデオロギー—言語バイオグラフィーの質的分析を通して」である。以下の三点を軸に試験を行った。まず、口頭試問での関連質問を行い、本論文が学位の水準に達しているか審査した。次に、本論文に関連する基礎的な専門知識や自らの論文の研究上の位置づけを問い、研究上の貢献について質問した。そして、本論文で取り上げた研究分野に関する授業科目「言語政策特論」「言語政策演習」などの視点から、学位に相応しい研究能力とその学識を有しているか審査した。以上の点から、本審査委員会は、本論文に加え、その分野における学位の水準に達していると認め、最終試験を合格と判断した。</p>		